

## 主な展示資料

### ①直島の海難文書

直島付近は群島や見え隠れする岩が多くある上に潮流も激しいため、海難多発海域でした。代々直島の庄屋役を勤めていた三宅家はこのような海難の際には、その都度検証を行い、その船が海難にあったことは仕方がないことであると証明する「浦証文」を発行しました。そのため 1,000 点以上にも及ぶ全国屈指の貴重な海難文書群がのこされました。このような庄屋家にのこされた海難文書をひもとき、当時の様子を紹介します。

### ②津田村北山の勝之助異国漂流関係文書

文政 13 年（1830）8 月、津田村出身の勝之助が乗船した岡山の神力丸は、岡山藩の年貢米などを江戸へ廻送している途中、紀州潮岬しほのみさき付近で暴風雨に遭遇し、自力航行不能となってしまいます。その後フィリピン・バターン諸島のひとつに漂着します。現地地方官の取り調べを受け、勝之助一行はマニラからマカオ、広東へ移送され、天保 2 年（1831）10 月乍浦さほという地から中国人商船により長崎に送還されます。一行は長崎奉行所で詳細に調べられた後、天保 3 年（1832）7 月から 8 月にかけて船員それぞれが生地に帰郷します。この時の漂流に関する記録を紹介します。

### ③難船絵馬

海難に遭うも無事帰ることができ、感謝のために神社などに奉納した絵馬のことを「難船絵馬」といいます。国内には 6,000 面を越す船絵馬があるといわれています。そのうち難船絵馬は約 1～2% 程度しか発見されていません。このような難船絵馬は荒れ狂う波の中を船が進む様子を描き、当時の船の形態や航海方法などを知る上で重要な資料となります。このような難船絵馬を紹介します。

### ④近現代の海難とその防止

明治期以降、灯台や航海用海図作成など、欧米先進国の技術を取り入れ、海難を防止し安全に航海をするために必要な施設や仕組みを整備しました。しかし瀬戸内海では昭和に入っても多くの海難が発生しました。なかでも昭和 30 年（1955）5 月 11 日に発生した「宇高連絡船紫雲丸の沈没事故」が社会に与えた影響は大きく、この事故を契機に、瀬戸大橋架橋に向けての計画が現実的に動き出しました。このような昭和期に入ってから海難や海難防止のための取り組みなどを紹介します。

### ⑤海底からの引きあげ

終戦直後の瀬戸内海には、戦時中米軍や日本海軍が設置した機雷の多くが残存しており、定期航路を航行中の汽船が機雷に触れ沈没するという事件が多発しました。そこで多度津町では、昭和 22 年（1947）多度津港における荷役や瀬戸内海主要航路の掃海作業を行う「港組」が創設されました。このような多度津「港組」の活動や、海の底からの引きあげ活動に従事した人物に焦点を当て紹介します。



①「浦手形之事」 三宅家文書  
元禄 8 年（1695）9 月 当館蔵



②「異国漂流人讃州高松寒川郡津田村北山平畑百姓久八倅勝之助之口書控」  
弘化 3 年（1846） 渡辺家文書 香川県立ミュージアム蔵



③広島神社奉納難船絵馬 明治 15 年（1882） 当館蔵



④四国新聞 昭和 30 年（1955）5 月 12 日



⑤ [二式飛行艇引きあげ作業風景]  
渡辺ハル資料 昭和 20 年代当館蔵